

## 『とりなしの祈り』

聖書 ルカによる福音書 23章 26～38節 讃美歌 8 280 288 297 312 28

説教 森田幸男牧師

今年の復活節は3月23日です。イースターの日としては最も早い日にちになると思います。クリスマスは固定祝日ですが、復活節は移動祝日ですので、年によって変わります。それで今日から7週間、復活節の前まで、主イエス・キリストの十字架上の七言を順次読んでまいりたいと思います。それで今日は34節にあります、『父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです』という主イエスのとりなしの祈りの御言葉を聞きたく思います。

ところで、先日この教会に始めて来られたある人が、北教会の感想を申されました。間接的に聞いたのですけれども、「北教会は長老さんの多い教会ですね」ということでした。その人は北教会のことはご存知ない人です。一度礼拝に来られて、「長老さんの多い教会ですね」とおっしゃったので、これは当たっているわけですが、意味するところは、いわゆる職務としての長老のことではなく、長じて老いた人、つまり長老という意味で、これは一見すれば分かります。その良し悪しの判断は言われなかったのですけれども、長老さんの多い教会、反対を言えば若い人が少ない教会ですねとこういうことであります。

先週の月曜日と火曜日、近畿中会の教職者会がありました。「日本キリスト教会の過去、現在、将来」というテーマでありまして、久々に充実した教職者会でありました。しかしその中で、今どの教会も遭遇している問題は、長老が増えている。つまり高齢者が増えて、教会が弱って来ている、数の上でも、財力の上でも。これは日本キリスト教会のみならずのことですが、そういう事が寂しげに異口同音に言われることが一つの特徴でありました。けれども先週の水曜日の集会の時にも申したことですが、このような発言については違和感を覚えました。“長じて老いた者が多くて、何がいけないの？”と、問いたい気持ちでございましたけれども、敢えてそのことは発言しないで過ごしました。やはり神の恵みは、長じて老いて、つまり長く生きて来て分かるのです。様々な時、所、問題を越えて来て、そこに神様の真実な導きがあるということが分かる。聖書に書いてあるからそうだというだけではなくて、自分自身の経験を通して、「そうです」と証することができる。文字通り身を持って証することができるのが長老だと思ふのです。

ただ今新任執事の任職式を行いました。日本キリスト教会の憲法にも、長老の任職式の式辞にも、長老の務めとして「教理の擁護」ということが明記されています。ですから長老たる者は、勿論、教理に通じていなければなりません。ですから例えば、牧師が聖書に基づかない説教をするようなことがあれば、これは長老が正さなければならぬわけがあります。そういう任務が長老にはあるわけです。

わたしはその通りだと思いますが、更にわたしは教理を擁護するという場合、長老たる者は、その言動、生活において恵みの教理を自分の身をもって証し擁護する。それがわたしは長老の務めとしての「教理の擁護」だと思ふのです。その様な人は、存在をもって聖

書を証している。聖書の真理を証しているわけですから、そういうあり方に触れた者は、牧師であろうが信徒であろうが、その証を尊び喜ぶのは当然のことです。

聖書を唯一の規範とすることと信仰義認、これがプロテスタント教会の伝統の要と書いていいわけです。それがやはり長じて、老いて、その長い道のりの中で受けた神の恵みの証なのだと思えます。

私たちが昨年来の教会の歩みを通して確認し、新たな思いで心に刻んだ事柄が多くあります。例えば、聖書に記されている人物で私たちと他人である者は一人もいないこと。確かに聖書に書かれていることは古い時代の事であります。しかしその人が遭遇した問題は皆、私たちが今日遭遇する問題なのであります。そういう次第で私たちは聖書と聖書に出てくる人物に非常な親近感を覚えています。そして世界の歴史、世界史、或いは世俗史と言っていいと思えますけれども、それと神の救いの歴史、救済史とが同時進行であることを経験を通して知らされました。そして今という時が神の恵みの時である。神の救いが遂行されている日であること。そして私たちの今は神の御心、御計画の中にある今なのだ。そういう様々な内容を込めて私たちは「ヤハウェ・イルエ」「神は備えてくださる。」「神は先を見て、必要なことを適確に着実に為さってくださる神様なのだ。」そういうことを私たちは経験を通して確認し、心に刻んだのです。

先ほど朗読されました今日の聖書の 26 節にこうあります。「人々はイエスを引いて行く途中、田舎から出て来たシモンというキレネ人を捕まえて、十字架を背負わせ、イエスの後ろから運ばせた。」これはたった 1 節の短い記述であります。

私たちは聖書を読む場合でも自分の理解力の範囲でしか読めないのは、これは誰の場合もそうです。理解力以上に読もうと思っても、それは出来ません。けれどもこの 26 節、1 節が語っている容量は大きいのです。このキレネは北アフリカの地ですがそのこの出身のシモンという、これはユダヤ人の名前です、使徒ペトロと同じ名前ですが、その人がこの過越祭にエルサレムにやって来た。その時がイエス様が十字架につけられるために今、エルサレムの市内を引き回されている。そこにぶつかった。そしてイエス様はもうその十字架を背負いきれないで倒れ、立ち上がっては倒れるようなことだったのでローマ兵はたまたま目についたキレネ人シモンに、死刑囚が負う十字架を代わって負わせたのであります。これはローマ権力による絶対命令で、いやだとは言えないわけです。そして彼は十字架を担いでイエスの後ろから付いて行った。こういう情景であります。

ユダヤ教徒にとって生涯に一度でも聖地エルサレムで過越祭を守るといのは、これは悲願であったと言われていています。彼がもしキレネから来た人であるならば、エルサレムまで大変な日数を要したわけです。仮に短くしてひと月空けるとすれば、その仕事をして、旅費も工面して、そしてというふうなことから、これはもう生涯に一度というのも分かります。

念願かなってエルサレムに来たところが、死刑囚の十字架を代わって負わされるという不運に遭遇したわけであります。人生最大の不運が降ってわいた。恐らく彼は人よりも肩から上に出るくらいの屈強な人であったのではないのでしょうか。ローマの兵士の目についてしまった。“この男に負わせよう”。だから彼はその瞬間“背が低ければよかった。目立たない人間ならよかった”と思ったかもしれません。でも後の祭りであります。

死刑囚が負う十字架を負わされて、その死刑囚の後について歩くなぞというのは、これ

は屈辱もいいところです。人間以下の屑にされたような思いになったことでしょう。

しかし今日の並行記事のひとつ、マルコ福音書 15 章 21 節を見ますと、このキレネ人シモンについて、更に、「アレキサンドロとルフォスとの父」という紹介文が付いています。ということは、この福音書が書かれた頃、アレキサンドロとルフォスとは教会内で知られる人物であったと推測されます。この二人は後にローマの教会の信徒になっているわけです。そしてこのシモンの妻、アレキサンドロとルフォスの母親を使徒パウロは、「あなたがたの母は、わたしの母です」(16:13)とまで言っていますから、パウロは大変世話になったということです。今日のこの箇所と、ローマの信徒への手紙の箇所との話がどうつながるかは、難しく、分からないことが多くあるわけですが、

その時彼はこれを人生最大の不運と思った。けれどもそのような仕方では彼はイエスなる人物と忘れようにも忘れられないように固く結び付けられてしまったわけですね。そしてその後、あの日こそ人生最良の日であったという時を迎えた。そしてその妻も子供たちも主イエスを信じる者になっていった。

聖書には書かれていないことがいっぱいあるわけです。その後その人はどうなったかということは殆ど書いてありません。ですから今申したことも聖書に断片的に記されていることをつなぎ合わせて物語を作っているわけですが、一番古い福音書のマルコによる福音書が、「アレキサンドロとルフォスとの父シモン」と、こういうふうに言っているのは、“その後はこうだったのですよ”ということの暗示だと思います。

そしてイエス様は十字架に付けられることになります。ですから今私たちは先ほど申しましたように、聖書に出てくる人物は他人ではない。本質的には私たちがそこに投影されている。そういう意味でキレネ人シモンもまた私たちと一つなる人物であります。

一方、十字架の下の人たち、先ほど 34 節を読みました。「そのとき、イエスは言われた。『父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです。』」こういうふうにイエス様は十字架上で祈られましたが、その下で、「人々はくじを引いて、イエスの服を分け合った」とあります。もし今日キリストの「聖衣」があれば、ネットオークションに出せば値が付けられないことになると思います。けれども、誰もこの死刑囚の血と汗と泥で汚れた衣類をもらっても嬉しくなんかありません。もう慣れっこになった死刑執行ですから、彼らは暇をどうつぶすかということなのですね。ですから、何を取るかということはどうでもいいわけです。要するに暇をどうつぶすかということです。くじ引きとかゲームだとか、パチンコだとか競馬だとか、何かそういうのが暇つぶしに人は燃えるんですね。ゲームでも賭け事でも、万も賭けなくても、十円でも五十円でも賭けたら、俄然その緊張度が高まるのです。ゲームというのは、本当にそういう点では面白いわけですが、正にこれはそうなんです。十字架など眼中にありません。

25 節、「民衆は立って見つめていた。」大衆は傍観しているわけです。「議員たちはあざ笑った。そして言った。『他人を救ったのだ。もし神からのメシアで、選ばれた者なら、自分を救うがよい。』兵士たちもイエスに近寄り、酸いぶどう酒を突き付けながら侮辱して、言った。『これは彼等が飲んでいた安物のぶどう酒だったかもしれません。主イエスは後に、「渴く」とおっしゃいましたけれども、渴きになお渴きを加えるような酸いぶどう酒を突き付けながら侮辱した。』『お前がユダヤ人の王なら、自分を救ってみろ。』イエスの頭の上には、<これはユダヤ人の王>と書いた札も掲げてあった。」これは罪状書きです。ヨハネ

による福音書の並行記事を見ますと、ヘブライ語とラテン語とギリシャ語で罪状書が書かれていたとあります。「自分が王だ」と僭称したとして、神を冒瀆し、ローマの皇帝も冒瀆したと、こういう罪状でイエスは殺されたということでもあります。その十字架上で、類比なき出来事が遂行されているとは思いませんでしたのであります。

今日の箇所を読んでおまして、以前にも皆さんに何度か話したことがあります宗教改革者マルチン・ルターの1517年の「九十五個条の提題」を思い出しました。比較的よく知られている事柄であります。免罪、或いは免償に関する九十五個条の提題ということで、つまりローマ・パチカンの聖ペトロ寺院の改修工事の費用を集めるために、教会はいわゆる免罪符、免償符を売り歩いたわけであります。

それに対して、そんなことで罪を償えとか、罪が赦されるということはない。そんなことは聖書に書いてないというのが九十五個条にわたるルターの問題提起だったわけです。そんなことを教会がすることは、イエス・キリストをも人間をも、貶めることになる、というのがルターの主張なのです。イエス・キリストの犠牲はそんな安っぽいものではない。また人間たる我々もそんなことで救われるほど、安っぽい存在ではないという主張が底流にあります。ところが当時の教会の教えは、集金のために、聖書の教えをゆがめ、聖書から離れていったということでもあります。

それで九十五個条の提題の第一提題は何度も申し上げましたけれども、こうなんです。「我らの主にして教師であられるイエス・キリストが、『汝ら、悔い改めよ』と言われるとき、それはキリスト者の全生涯が日々悔い改めであることを求めておられるのである。」これが九十五個条の第一提題であります。

イエス様が、「汝ら、悔い改めよ」とと言われるとき、それはキリスト者の全生涯が日々悔い改めであることを求めておられるのである。」ある時、私たちは目覚めます。目が開かれます。そこから転機を迎えるわけですが、全生涯にわたる日々が目覚めの連続であることを主は求めておられるのだ、とルターは言うのです。

「悔い改め」という言葉は、「回心」と言ってもいいと思いますが、わたしは「理解の改まり」と言い換えて来ましたが、今日は、「理解の根本的変革」というふうに言い換えたいと思います。私たちは確かに知ったと思うわけです。知るわけです。けれどもそれはごく一部、イエス様の衣の裾に触れたようなことで、イエス様全体を知るということは、あたわぬことだというのが、ルター自身の経験だったと思います。

そういうことを通して宗教改革が始まったわけであります。そういう点では、ルターは教会の指導者のローマ教皇も、多くの者が教会を挙げて皆、聖書からはずれてしまっている。そういう思いに突き動かされて九十五個条の提題を教会の扉に掲げたのです。それは当時の習慣で、“このテーマで討論しましょう”ということです。そして彼は教会から破門されるわけです。このように、ルターの宗教改革当時の者たちも本当に何をしているのか分らないでいる。一般世俗の人々というのではなくて、教会が上から下まで、何をしているか分らないでいる。そして、「私自身がそういう教会の一員だった」というのが、ルターの告白ということになると思うのです。

わたしは最近読んで面白い本があります。皆さんの中にも読まれた方がいるかと思いますが、ニーチェというドイツの哲学者の書いた、「アンチキリスト」という本です。副題は「キリスト教批判の試み」という本です。これは1895年に出た本で、私たちの教会の創立

とほぼ同時期です。実際書かれたのはもうちょっと前なのですが、彼は1900年に亡くなっています。十九世紀の終わりから二十世紀に移るころ彼は51歳で亡くなっています。彼はルター派の牧師の息子として生まれました。最近いろんな本が現代訳という形で出ていますね。「般若心経」の現代訳、「歎異抄」の現代訳など、昔の言葉のままだと、書いてあることの意味が分り難いので、現代語に置き換えることが今流行になっています。この本も現代訳で「講談社 新書」で出ています。タイトルはどうなっているかというと、「キリスト教は邪教です！」という題で出ています。

けれどもこれは、神を否定したり、キリストを否定したりは、実はしていないのです。キリスト教批判の書です。「アンチキリスト」という原題は現代語訳すれば「キリスト教反対」と言ったところです。キリストの否定ではなく、キリストは本来、彼に言わせれば、「善い生を生き切られた」と言っているわけです。しかしそれを神だとか何だとかに祭り上げて、歪めにゆがめて、しかも同時に人間は罪深い者だとゆがめて、この人間の高貴さというものをキリスト教が駄目にしたのだと批判しているのです。

そして彼は科学的な目というか、在るものがあるがままに見るといえることが大事だと言います。そういう精神を回復したのが宗教改革と同時期のいわゆるルネッサンス、文芸復興だと言います。ギリシャ文化を復興して、もう一度人間性を回復しようとしたのが文芸復興でこれは正当な事だと言うわけです。それに対してキリスト教はキリストの精神を歪めて、人間を罪の虜にしまい、人間の値打ちを落とした。これはキリスト教の大罪だという宣告を下しているのです。そして彼は1900年に死んでいますが、過去の歴史を紀元前にまで遡って古今東西の哲学、諸宗教をよく学んでいる。そういうものをずっと挙げて、もうばったばたと切っている。爽快と言えば実に爽快です。そしてキリスト教も切られているので、自己反省を迫られるわけであります。人はこれが真理だと言う。けれどもそれは自分の個人的な経験や、主観的な思いつきを真理だと言っているに過ぎない。これもそうだ。これもそうだと言って、ルターまで切っています。

それでこの本の最後は、どういう言葉で終わっているかというと、「今日をもとにして、すべての価値を転換せよ！」というのが結びです。「今日というこの日を境にして、すべての価値を転換せよ！」だから真理でもないものを真理だとしているなら、それは改めねばならないのです。ですので、私の読後感“ああ、ルターの姿勢のDNAをニーチェは確実に受けているな”ということです。ルターは宗教的な表現で、ニーチェは哲学的な表現で同じことを言っている。神とキリストと人間の回復を、本当に命をかけて求めているという点で、共通性があると思いました。

いずれにしても、今日の聖書において、このように主は十字架上で、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」と祈られました。まず祈られているのは当時の人です。けれども初めに申しましたように、私たちはどうなのか。私たちはどこに立っているか。その事をこのイエス様のお祈りによって私たちは問われている気がいたします。

これも以前に、非暴力で戦い抜いたあのガンジーのお墓の墓碑に刻まれた「七つの社会的罪」というのを紹介したことがありますが、第七項目は「社会的罪」のこれが要という思いで書いたのでしょう。「犠牲なき礼拝」とことうふうにガンジーが、「これが社会的大罪なのだ」と、言っている言葉が墓石に刻まれているそうであります。

イエス様のこの十字架上的祈りは、その三十数年の生涯の歩みと一つだと思えます。イエス様の生涯全体が正にとりなしの祈りであり、行動であった。本当に存在をかけてというか、捕らわれの中にある人、病の捕らわれ、精神的に捕らわれ、霊的な捕らわれ、その捕らわれからの解放を求めた一人一人に接して、それらの人を解き放つ。その一点にイエス様はすべてをかけられた。わたしはザアカイの家に泊ったという、あのルカによる福音書が書いている物語にその典型を見ることが出来ると思えます。ザアカイ一人の自由のためにイエス様は自分のすべてを注ぎ出されました。そしてその延長線上に十字架上のこの祈りがあるのだと思えます。従ってこの執り成しの祈りは、私たちのためのとりなしの祈りでもあります。

今日のこのイエス様のとりなしの祈りを読みながら、今日、礼拝の始めにご一緒に唱和しました日本キリスト教会の信仰の告白の冒頭の部分が、一層印象的でした。

「我らが主と崇むる神の独子イエス・キリストは、真の神にして真の人、永遠なる神の経綸に従ひ、人となりて人類の罪のため十字架にかかり、全き犠牲をささげて贖いを成就し、復活して永遠の生命の保証をあたえ、救いの全うせらるる日まで我らのために執り成し給ふ。」

またパウロのロマ書8章にもこうあります。31節以下です。

「もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。だれが神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。だれがわたしたちを罪に定めることができます。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができます。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。」

ですから、イエス様の執り成しの祈りは、十字架上でなされたばかりか、我らの救いが全うされるその日まで、私たちのために執り成してくださるのであります。イエス様の十字架上の祈りと地上のイエス様の歩みとは一つです。わたし達は常にこの執り成しのなかにあります。私たちは自分のことがよく分かっていない者であり、そういう者の目が開かれ、また開かれて、生涯の日々、回心の喜び、理解が改まり深化させられる。見えていなかったという深刻な自覚の中で、見える者とされた喜びが展開して行く。進んで行く。それがキリストに捉えられ、目を開かれた者の幸いだと思えます。

お祈りいたします。

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。

主イエスの十字架上の執り成しの祈りに触れて、私たちもわきまえない者の一人であることを新たに覚えます。本当にそのような者として、あなたの御前に獣同然の弁えなき愚かな日々があったことを思い起こします。あなたはそのような者を憐れみ、見捨てたもうことなく、今日在らしめてくださいます。これはすべてあなたの恵みによることを覚え感謝いたします。どうか御心に添う歩みを日々なさしめてください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン